

和高田へ帰り、重傷の父に会うことができませんでした。父は死ぬ前「苦勞をかけたな」の一言を残して、一月三十日に死にました。家族の皆は、親父は私の帰るのを待っていたようだと言っていました。母は昭和三十六年に死亡しましたが、その間親孝行をすることができませんでした。私は、復員後、関西電力に復職し定年まで勤めることができました。

思えば、ノモンハン事件、高雄沖での海没と、百何十分の一の確率で私は生きて帰ることができました。もし、あのとき、胸部疾患にならなかつたら、船舶通信第四大隊要員一五〇人中ただ一人、本部勤務となつた下士官試験で軍人勅諭の礼儀の項を間違っていたなら、これが私を死から生へ転換させた運命だったのです。

また、中国からの復員の昭和二十一年一月とは最も早い帰還であり、そのため重傷の父親と会うことができ、父を安堵させ、あの世に送ることができました。弟も無事帰還、妻子も戦災の中生き延び再会できました。このようなことを思うにつけ、私は幸せであった

と思いつつも戦没戦友の冥福を祈る人生でもあります。

重砲兵第七連隊

沖繩戦で生き残れた私

沖繩県 島袋 全裕

私は大正十四年、那覇市で生まれましたが、本籍は戦前は西新町三ノ十三、戦後の現在は辻一丁目十ノ一、現住所は桶川一丁目二六ノ二四であります。

昭和十九年四月、国家総動員法、学徒動員によつて戦局が緊迫している沖繩で陣地構築に従事し、さらに海軍航空隊小禄飛行場（現那覇飛行場）設営隊勤務、十月、小禄海軍航空守備隊高射機関銃中隊が米軍機により襲撃を受ける。南西諸島大空襲あり対空防空戦に突入しました。これが我が現役入営する直前までの、沖繩ならびに私自身の状況であります。

昭和十九年十月十五日、沖繩守備軍である第三十二軍、與那原の重砲兵第七連隊（球四一五二部隊）に入

営しました。沖繩県出身の現役兵は二百人ぐらいです。我が連隊は総員七百ぐらいで、その中に各中隊へ配属されたが、私は本部通信兵となりました。

教育は与那原でした。幹部候補生を受けようとしたが、十月十日の那覇大空襲によって、教練の証明が学校と共に焼け、書類が無くなっていった。十月十五日入営ですから幹候の手続は取れず下士官候補生になりました。私は甲種合格で体力には自信があり、沖繩出身の初年兵の中では大きい方でした。

初年兵の教育は一選抜で衛兵勤務にも就き、上等兵進級も一選抜でした。專業は通信の有線でした（沖繩では無線は使えず、無線は米軍が上陸して四、五日で全滅した）。

私が通信に選ばれたのは入営時にさかのぼります。十月十五日入営のときは全部が焼野原になっていたのですが、「与那原の十字路に集合せよ」という通知があったが、どこの部隊に入るのか分からない。集合場所に行き立って待っていると、そのとき下士官が手旗信号をやり、「読める者は書け」と言われた。私は学生時

代モールス信号や手旗を教わっていたので、手旗信号を読んで書きました。

初年兵のうち十二人が選ばれ、連れて行かれた部隊が重砲連隊でした。将校は北村少尉で大変かわいられた。初年兵が古参兵に制裁をされるるとき、私は通信室勤務に行かされた。通信室は秘密で、部隊長・通信将校・下士官しか入れない。制裁しようと古参兵が追い掛けてきても室には入れない。

通信室では即実地教育を受けたのです。学校時代の通信の特技が生き、そのため北村少尉や下士官に目をかけてもらいました。

戦争が始まって、他の通信初年兵は教育が間に合わぬので使い者にならず、弾薬運搬などして戦死する者が多かったのですが、私は下士官と一緒に通信勤務をしていました。

通信線が切断されたのを下士官と一緒に補修に三キロくらい走る。通信室と司令部の間、暗夜でも線をつかまえて、それをたよりに走って行く。一キロも走ると線を握った手が摩擦で熱くなる。その間皮手袋をし

ているが摩擦熱がなくなったら線が切れている証拠です。すると百〜五十メートルでも戻って、本部の線を捜し、司令部の線を捜して補修します。一日に何回も切れる。距離は三キロくらいあり危険が多いので、お墓の所まで線を引っ張り、そこで待機し、電話で連絡し話が切れたら、線が切れた証拠。

司令部の線の入口には各部からの線がケープル状になつている。その中から自分の隊の線を捜す。壕の中において艦砲射撃や空爆でやられる者も多かつたのですが、私は第一線で作業をしていたが生きていました。

十一月には中城湾要塞司令部、連隊本部通信隊に転属して勤務していました。軍司令部の情報を書く中隊や配属関係部隊に連絡するのが私の任務でした。交代なしのためレシーバーを掛けていて軍司令部の情報を先に取り、その後直接連絡が来る。軍司令部から「復唱」と言われると、私は、先にレシーバーで聞いているから二回聞いているので完全に復唱できました。当時私はまだ一等兵でしたが、一人で勤務にでっぱなしでしたから、他隊の上級者が食事を運んでくれていま

した。

各隊は蛸壺のような所でしたが、本部は本隊の大里城陣地にある。三階建ての地下壕に三百人以上入っていました。その陣地には重砲第七連隊のみでなく、知念地区支隊の各隊の通信隊も集まっていました。大里城陣地が知念地区支隊でした。

与那原の町は艦砲射撃で焼けた。中部方面からと南部からの重要地点でした。昭和二十年三月、我が兵舎も焼けたので、守っていた小銃兵は大里城陣地に移動し、私も一緒に行つて陣地に入りました。そのころ、ケラマ列島に米軍の艦砲射撃が始まりました。

* 私は証言者島袋氏の案内で与那原に行つたが、野戦病院の跡や、北部一キロ余の運玉森での日米の攻防、手榴弾戦、昼は米軍が占領し、夜は日本軍が奪回する激闘や、首里城の地下陣地戦など見聞することができました。

与那原、雨乞森、大里城で重砲第七連隊の陣地跡、全滅した第二中隊の知念半島や米軍戦艦や巡洋艦が湾

を圧しての艦砲射撃の壮烈さ、珊瑚礁が隆起した大里城が砲弾により岩が砕け飛び、これによって殺傷された者も多かつたことも、岩片を見て、さもありなんと実感しました。大城陣地を後方（西側）から襲う米軍との手榴弾戦など、生き残りの島袋氏の話は五十年前の沖繩戦を彷彿再現させる迫真のものでありました。

四月一日米軍が上陸したとき、私は与那原の兵舎（本部三百人）に通信兵として通信室に残り、他の大部分の兵は壕に入るため出て行きました。しかし、米軍上陸し一カ月くらいは第二戦陣地で比較的平穏でしたが、上陸して第六十二師団（石兵团）の前線まで米軍が来た五月から戦闘が本格的になり、司令部の首里も危なくなりました。通信隊は有線も無線もなく、重砲連隊の通信兵は小銃がないので手榴弾を四発くらいを持って切り込みに出ました。

ですが、第六十二師団や第二十四師団（山兵团）の歩兵が前線で戦う。我々重砲隊は歩兵教育を受けていないので、歩兵が前線に出て、我々はその後について

いく（海軍を含め）。歩兵が切り込みに失敗したら我々の番ですが、突っ込む前我々は百〜二百メートル前で準備しているのだが、爆雷を持って突っ込む訓練は受けていない。

歩兵が切り込みに行くが成功率は少なかった。米軍は南方、サイパンなど南洋諸島や比島などで、日本軍の万歳突撃に懲りているから警戒を厳重にしています。ピアノ線に引っかかるし、照明弾が逆三角に打ち上げられ、夜間が昼間のように明るくなるから、日本軍の姿が敵からもよく見える。その上に米軍は特に目標なく盲滅法に弾幕を張っているから、突っ込んで来る日本兵は蜂の巣のようになって戦死してしまいました。

大里城陣地で切り込みを行ったとき、敵との間隔は百メートルくらいまで近づいた。第一線は各中隊の小銃分隊、小銃の無い通信や本部などは第二線でした。守備担当の独立混成第四十四旅団司令部（知念地区支隊）から「何月何日、切り込み隊何名準備せよ」の命令がある。通信・暗号・観測・指揮班は五〜六〇名、

これが第二線グループです。そのグループから何名出せと命令がある。各部隊から選抜されて出る。海軍記念日とかの時を期してでありました。各部隊は一斉に行動、突撃をして米軍の第一線を突破はしましたが半分以上が犠牲となり、切り込みは中止となりました。

首里を守るための戦鬪は第六十二師団が中心となり、海軍の特攻機は各飛行場を攻撃しました。米軍の弾幕は花火のようでした。艦船に対しても突っ込んで行きました。与那原には海上特攻隊（震洋）があり、山からレールで海岸へ降ろして、海上を船舶目掛けて特攻するのを、我々は山から見ていましたが、ローソクが燃えるようにくるくる回り、やられてスーツと海中に消えて行く。

*震洋はベニア板張りの小艇で船に爆薬を仕掛けてあり、艦艇に体当たりする特攻艇であるが敵艦に近く前に沈没させられたり、障害物（丸太など）を流してあるので特攻艇は、敵艦まで近づけなかったようである。

我々の大里城陣地に敵が来襲したのは五月二十日ごろで交戦状態となりました。昼は壕に入り、夜は出て行って攻撃するのだが、一人倒れ、二人倒れ兵員はだんだん減って行き、五月二十二日ころには第三十二軍司令部は南部へ撤退しました。

沖繩には洞窟（ガマ）が沢山あり、大里城も自然洞窟を利用しての三階式、雨乞（雨乞い）森で手榴弾戦、米軍陣地を撤退するときはジグザクで逃げる。米軍は森の中で追い掛けてくる、知らなかった。米軍は徐々に大里陣地に侵入し、我々の洞窟に、「馬乗り攻撃」をかけてきました。

馬乗り攻撃とは、米軍がサイパン島などで経験してきた攻撃法です。壕に日本兵がいると思うと上から手榴弾を投げたり、火焰放射器で攻撃してくる。手も足も出ないのです。日本軍は切り込み、万歳突撃となり、犠牲がどんどん多くなる。

それでも大里陣地は五月二十八日ごろまで頑張り、首里の司令部の南部撤退を援護していました。他の周

團の部隊、第六十二師団、我々指揮下にあった独立混成第四十四旅団の各隊も同様でした。海軍の大田少将らはこれに協力しつつ、小祿飛行場の元に陣地撤退していきました。

米軍が首里城を攻撃し、先に申したとおり司令部は南部へ撤退して行きました。大里城陣地で我々通信隊は三階に上がり死ぬ覚悟をしていましたが、他の人たちは脱出し途中でほとんど戦死しました。城は階下は焼け、弾を受けながら一人、一人脱出して助かったのです。我々重砲隊は五月二十八日ごろまで頑張りましたが、撤退したときは二百人くらいに減ってしまいました。第一中隊や知念半島の第二中隊は全滅し、残ったのは本部と第三中隊だけになってしまいました。我が部隊は与那原―志堅原―湊川を経て、具志頭（グシチャン）陣地に入りました。住民も兵隊も一緒に撤退する。軍が南部に撤退するので一般人も軍についてくる。部落に着くと米軍がそれを見付け、二三日後に攻撃してくる。民家が各所に在ったので、そこに入り宿舎とし飯を炊いたりする。夜になると米軍は、時

間を決めて、ある所に焦点を決め艦砲射撃をしてくる。運が悪いと闇夜に鉄砲で被害が出ました。

六月五、六日になると、米軍は首里、那覇を陥し、南部方面が騒がしくなりました。第三十二軍司令部は南端の摩文仁に在ってそこで指揮をしていたので、米軍は、西、中、東と三方から攻めてきます。

我々が願ったのは「雨が降ってくれ」ということです。雨期になれば道も泥土となり戦車が通れなくなるし、霧がかかるので空襲や艦砲射撃がない。陸軍は戦車がなければ日本軍の方が強い。雨の間が一時休憩で、命の洗濯、煙が出て大丈夫なので食料も炊ける。

我が重砲兵隊も砲兵として行動ができなくなったので我々通信兵は他の部隊へ入って通信関係を受持ち、食料や壕生活の世話になる。一宿一飯の恩義です。そのような状態を続けながら南下、同じ部隊でも、特に他部隊は快くは迎えてくれない。壕に入れない部隊はみじめです。自分で壕、洞窟を捜さなければならぬ。民間の家に入ると空襲などでやられます。

具志頭、玻名城、与座（今は自衛隊通信隊あり）で、

摩文仁の軍司令部を守るのは、与座、安里、八重瀬岳の岡が防衛線です。これが突破されれば軍の組織は崩壊してしまふ。我々通信というより、手榴弾を持って他部隊に配属された。南部へ撤退の部隊の組織はほとんどなくなり、砲や重機関銃が置き去りになっていました。

我々のこの陣地が突破されたら、前から陣地を構えていた部隊が戦う。このときは司令部の命令でなく、各部隊ごとの行動になっていました。我々は福地、糸州の間の畑へ集まった。八重瀬岳、富盛付近に新品の被服などが集積されていて、全部新しいのに着替えた。死のうと覚悟したからです。

東部の人たちは西部へ、西部の人たちは東部へと、各々情報が混乱していたので、何万人という人たちが行ったり来たりしていました。米軍はその非戦闘員の群衆に対し榴散弾を使った。弾が破裂すると花火のようにパチンコ玉のような小さな弾が飛び散り多くの人が死傷しました。夜も照明弾や曳光弾が飛び交う。心理的にも弾が追って来るようでした。真栄里で米軍の

バックナー中将が監戦中戦死したので、米軍は「敵討ち」として、民間人も何もかも無差別で徹底的に艦砲や爆撃を交えて攻撃してきたと後で知りました。

我々は福地の畑に四、五日いて、名城陣地を通って二十一、二十二日に海岸をたどり、軍司令部に合体しようとなりました。しかし、軍司令部は日本軍が与論から逆上陸して来るということで北部へ突破し、国頭地域へ行き北部の部隊と一緒に攻撃しようとした。計画したような情報でした。

六月二十三日、軍司令部が全滅したと分かってから、部隊は解散状態で、めいめい北部へ行こうと言う。私は二十年三月に入隊した沖縄県人の初年兵五人を連れて与那原の前の陣地へ行き北上しようとした。そのときは雑糞に手榴弾だけを入れて持ち、兵器は持っていませんでした。

通信関係者はほとんど戦死やバラバラになっていた。他は観測、暗号などで、今生きている人もいる。

沖縄の初年兵は十八、九歳でしたので五人を連れて湊川の北へ行った。海岸には米軍の艦船があり、艦砲

射撃をしている。海岸は歩けず、山手の百名部落を通過して前の陣地へ行こうとしたが、志堅原は米軍の戦車隊の駐留地となっていました。食糧捜しに山中を歩いているとき、穴を見付け、そこが屑捨て場で、パンや缶詰、タバコなどがあり何とか食べていました。しかし、夜しか歩けないので鼠のようにして外へ出た。ピアノ線に引っかけたり爆破された人もいたので、それを避けさせて食糧を捜す。動物的というか。

その陣地を突破した積りだったのが逆にその中に入ってしまった。だれかが戦車に触れたので射撃された。田中は腕や足をやられ、自決するため海岸へ出て行って俘虜になりました。米軍戦車隊へ入ったとき、私も射撃されたが、背に背負った缶詰に穴が空き、水分が染みてきて、やられて血だと思った。

逃げ残った我々はバラバラになり、私はピアノ線にくぐり抜け百名部落へ逃げ着いた。ところが、そこは俘虜収容所（民間も兵隊も）となっていた。そこへ収容されていた民間人が「軍服を脱げ」と言っただけを着物を着せられました。色が白いと内地人と間違えられる。

米軍は沖繩人と朝鮮人とは大目に見ていて、収容所では日本兵と分けられていました。

ここでは米軍の沖繩二世が調べる。沖繩語が話せるかどうかを調べられるのです。私は学生だと言っただけで、兵隊でないと行ったら「ローマ字で名前を書け」という。その後、米軍の通訳と一緒に調査員となりました。

その間二週間くらいは米軍と同じ食糧を支給されましたが、自分の隊の人と合うとバレルので調査員を辞めました。その後、軍人軍属と見做される者の北部の収容所へ入り、南部の沖繩人の避難民四千人を北部の屋嘉収容所から連れて、自動車で嘉陽部落へ行き、学校の教師となりました。

沖繩本島出身の私が生き残ったのは、私が生きていれば骨を拾ってくれるであろうと、上官や先輩たちも私を生かしてくれたのだと思います。私は摩文仁の碑が木で建てられたころから、終戦以来五十年間南部の遺骨収集に努力してきました。それが生かされた私の務めであると思っています。